

公立中高一貫校入選(入試)概況

◎ 公立中高一貫校では、正式には入試とは呼ばず、行政に合わせて「入学者選抜(略して入選)」という用語を使用していて、「受験」ではなく「受検(検査を受ける)」という用語を用いています。

◆ 東京都

東京都教育委員会は、中高一貫校で高校募集を行っていた白鷗高附属、両国高附属、大泉高附属、富士高附属、武蔵高附属について段階的な高校募集停止・完全一貫化と中学段階での定員拡大を行う方針で、一昨年は富士高附属と武蔵高附属、昨年は両国高附属と大泉高附属が募集定員を拡大、今年最後の白鷗高附属が定員を拡大しました。東京都の公立中高一貫校は区立の九段中等を含めて11校で、11校合計の今年の応募者数は7,675名でした。2019年の9,156名以来4年連続の減少で、約16%減っています。個別各校の人気の変動はありますが、特に昨年と今年は、コロナ禍対応での追検査の対応の公表が遅く、受検生側が安心して検査に臨みにくいことが減少の理由の一つでしょう。今年も特例の検査を実施することになりましたが、その公表は昨年よりさらに遅く、2月2日の一般枠検査前日でした。

まず区立の九段中等から。同校は応募枠が区分A(千代田区民枠)と区分B(千代田区民外枠)に分かれています。区分Aは一昨年が男女とも応募者が減っていて、昨年は男女とも増加、今年は男女とも昨年並みです。区分Bは、一昨年が男女とも応募者は減少、昨年は男女とも前年並み、今年は女子が減っていて、男子もやや減っています。区分Aは男女とも昨年並みの難度でしょう。区分Bは男子の欠席が増えたこともあって、男女ともやや入り易くなったかもしれません。

続いて23区の都立です。定員拡大の白鷗高附属から。同校は帰国・外国人枠、伝統文化の特別枠、一般枠の3本立てです。帰国・外国人枠は、昨年は女子が一昨年と同じ応募者数、男子は減っていて、今年は男女とも減りました。コロナ禍もあって、帰国生や入国した外国人も減っている影響でしょう。ただ、帰国生・外国人枠も定員拡大になっていて、応募者数の減少で定員割れ、全員合格になってしまいました。伝統文化の

特別枠は男女合計で一昨年から同じ応募者数が続いています。実力が求められますから不合格が出ています。入選の性格上、難度のコメントは控えます。この記事の最後に内訳を載せました。一般枠は昨年まで男女とも応募者が減少傾向でしたが、定員拡大に期待した受検生が多く、男女とも増加しました。男子は定員拡大が効いて少し入り易くなったようです。女子は定員の増加分と受検生の増加分がちょうどバランスして、難度に変化はなさそうです。

小石川中等の特別枠は、今年は男子2名の応募で、合格者は出ませんでした。一般枠は一昨年、昨年と男女とも応募者が減っていましたが、今年は男女とも少し増えています。男子は欠席が増えて実際の受検者数は昨年と同数でしたから、難度に変化はなさそうです。女子は受検者数が少し増えています。やはり難化するほどではなかったようです。両国高附属は、一昨年は男子の応募者がやや増えて女子は少し減り、昨年は男子が微減、女子が減っていました。今年は男女とも昨年並みです。実際の受検者数もほぼ同じで、昨年は定員拡大で少し入り易くなっていましたが、今年も難度は変わっていないようです。

桜修館は一昨年男子の応募者が増えて女子は前年並み、昨年は男女とも減っていましたが、今年は男子が増加、女子も少し増えています。男女とも実質倍率は少し上がりましたが、難化するほどではないようです。大泉高附属は一昨年、男子の応募者数が増加、女子は減っていて、昨年は女子が増加、男子も小幅ですが増えていました。今年は男子が少し減り、女子は少し増えています。昨年は定員拡大で少し入り易くなっていましたが、今年も昨年とあまり変わらない難度だったようです。富士高附属は、一昨年は男女とも応募者が減っていて、昨年は男女とも増加、今年は女子が減りましたが、男子は昨年並みの応募者数でした。男子は受検者数も昨年と同数で、難度も変化はなさそう

です。女子は実質倍率が下がり、少し入り易くなったようです。

多摩地区も見てみます。三鷹中等は、一昨年は男子が小幅だったものの男女とも応募者が減り、昨年は男女とも増えていて、今年は男子が減って女子は少し増えました。実際の受検者数も同傾向で、男子は入り易くなったようですが、女子は少し難化したようです。武蔵高附属は、一昨年は男子の応募者数が増加、女子は減少、今年は男子が減って女子が増えていました。今年は男子が昨年並み、女子は少し減っています。男子は昨年並みの難度、女子も入り易くなるほどではなく、やはり昨年並みの難度でしょう。

立川国際は帰国生・外国人枠と一般枠の2本立てです。帰国生・外国人枠の応募者数は一昨年からやや減っていて、昨年、今年とやはり減少が続いています。コロナ禍で帰国生や外国人の入国が減った影響でしょう。不合格者が減ったため、入り易くなったようです。一般枠は、一昨年は男子の応募者がやや増加、女子は減っていて、昨年は男女とも増加しましたが、今年は男女とも減りました。昨年の反動でしょう。男女とも少し入り易くなったようです。南多摩中等の応募者数は、一昨年、昨年と男女とも減少が続きましたが、男子は今年も減少が続いたものの、女子は昨年並みで、高倍率への敬遠が少し止まってきました。男子は実質倍率が緩和しましたが、入り易くなったかどうか、と言ったところでしょう。女子は昨年並みの難度だと思われます。

今年の都立各校の合格者の辞退は小石川中等の女子が最多で17名、同校の男子は12名、両国高附属の男子は13名、桜修館中等の女子が11名など、合計109名で、昨年の97名よりも増えています。いずれも難関私立中の併願者です。

なお、冒頭に記したように今年も都立・区立全校を対象に「特例による検査」が2月15日に計画され、大泉高附属と立川国際中等を除く各校に合計で22名が申し込みました。8名が合格しています。高倍率の学校もありますが、難度のコメントは控えます。

◆ 神奈川県・千葉県

神奈川県には5校の公立一貫校があります。昨年は神奈川県立の2校、今年は横浜市立の2校が男女合計定員に変更になったため、5校全部が男女合計定員に

なりました。また、今年もコロナ禍対応でグループワークは実施していません。5校合計の応募者数は3,639名で、昨年の3,704名から減っています。

県立の相模原中等は、一昨年は男子が前年並みの応募者数、女子はやや減っていて、昨年からは男女合計での公表で、応募者数は少し減っていました。今年も少し減っています。ただ、入り易くなるほどの減り方ではありません。昨年並みの難度でしょう。平塚中等の応募者数は、一昨年は男女とも増加していましたが、男女合計公表になった昨年は減っていて、一昨年の反動が見られました。今年も少し減っていて、高倍率敬遠ムードが見られます。実質倍率は少し緩和したことから、やや入り易くなったかもしれません。

横浜市立のサイエンスフロンティア高附属は、一昨年は男女とも応募者が増加、昨年は男子が一昨年並み、女子がやや減っていました。今年から男女合計定員になっていて、応募者が減っています。男女合計定員になったため、昨年の実質倍率と比べると男子は少し緩和、女子はやや倍率がアップしていて、高難度の中にも、男子にやや有利な結果だったようです。市立南高附属は、一昨年は男女とも応募者が増えていて、昨年はその反動から男女とも少し減りました。今年も男女合計定員になりましたが、合計の応募者数は昨年並みです。合計定員になったため、男子は倍率アップ、女子はやや緩和しました。女子は有利だったようです。

市立川崎高附属は、一昨年から全日制普通科の募集が停止され、完全中高一貫になっていて、開校時から男女合計定員です。応募者数は一昨年、昨年と前年並みでしたが、今年は大きく増えました。実質倍率もアップ、少し難化したようです。なお、県立・市立全校で、新型コロナウイルス感染等で受検できなかった場合の「特例による検査」が共同で2月23日に実施され、相模原中等と横浜市立南高附属に合計5名が申し込みました。合格者はなく、難度のコメントは控えます。

続いて千葉県です。県内公立一貫校3校の合計の応募者数は、一昨年は前年より減、昨年は大幅に増加、今年も少し減って2,214名でした。昨年の大幅な増加は、市立稲毛高附属が6年間完全中高一貫の市立稲毛国際中等に改編され、募集定員が倍増したことで同校の応募者が1.4倍と大きく増えたためです。その稲毛国際中等は、今年も昨年並みの応募者数で、人気は変わっていません。2次の受検者数が昨年より少し減つ

ていますが、この程度なら難度に影響はないでしょう。

県立千葉は、昨年は男子の応募者が少し増えて、女子は少し減っていました。今年は男子が減少、女子は少し増えています。女子は一昨年、昨年の減少の歯止めがかかった形ですが、男子は高倍率が続いていたためか、少し敬遠ムードが出たようです。1次は男子の実質倍率が少し緩和していますが、2段階選抜ですから難度はあまり変わっていないようで、女子も難度には特に変化がなさそうです。県立東葛飾は、昨年は男女とも応募者が増えていましたが、今年は男子が減少、女子も少し減っています。男子は県立千葉同様、高倍率敬遠ムードでしょう。同校も男子の1次の実質倍率は緩和していますが、2次も含めれば昨年並みの難度、女子もあまり変わっていないようです。

◆ 埼玉県・栃木県

まず埼玉県から。県内4校合計の応募者数は2,107名で、やや減ったものの、昨年並みと言ってもよいでしょう。市立浦和は、昨年は男女とも応募者数が増加しました。今年は小幅ですが男子の増加が続き、女子は昨年と同数です。2段階選抜で、1次は市立大宮国際と併願できますが、2次は併願できません。1次合格者の2次受検者数は女子が減少、男子も少し減りました。市立大宮国際に流れた受検生が昨年より少し増えたのでしょう。難度面はあまり変わっていないようです。市立大宮国際中等は、昨年は市立浦和と同様、男女とも応募者が増えましたが、今年は男女とも昨年並みです。1次合格者の2次受験者数は男子が昨年並み、女子は少し増えました。ただ、市立浦和と同様、難度面はあまり変わっていないようです。

開校3年目の川口市立高附属は、昨年は男女とも応募者が減りましたが、今年は男子が少し増えて、その分女子が減り、合計では昨年と同数です。一昨年は開校人気、昨年はその反動で応募者が減ったものの、3年目で人気が安定してきたようです。1次合格者の2次受検者数は男子が少し増えて女子は昨年並みですが、同校も難度はあまり変わっていないようです。県立の伊奈学園は、一昨年は応募者が前年並み、昨年は少し増えたものの、今年は減っています。1次合格者に2次の面接を実施する方式ですので、難度面はあまり変わっていないようです。

続いて栃木県です。県内3校合計の応募者数は711

名で、昨年より少し減っています。宇都宮東高附属は、昨年は女子の応募者が減って、男子もやや減りましたが、今年は男子がやや増加、女子はやや減少、合計では昨年並みです。国立の宇都宮大附属と併せて検討している受検生が多い学校で、宇都宮大附属は男子がやや減少、女子はまとまって減ったため、今年は宇都宮東高附属の受検生の動きとは連動していません。受検生の動きが少し変わってきたのかもしれませんが。トータルの応募者数は昨年並みですから、難度はあまり変わっていないようです。

佐野高附属は、昨年は男子の応募者が若干減って、女子は大きく増えていましたが、今年は男女とも減っています。隔年的な変化ですが、地域の児童数の減少も影響したようです。やや入り易くなったかもしれません。矢板東高附属も、今年は男女とも応募者が減っています。昨年は男子が一昨年と同数、女子は大きく増えていました。同校もやや入り易くなったかもしれません。

◆ 茨城県

茨城県では公立高校再編の一環で、2020～2022年度で10校の公立一貫校を新設、従来からの3校と合わせて13校と、首都圏トップの学校数になりました。これで計画は完了しています。新設開校人気が一段落したようで、昨年まで増加が続いていた、各校合計の応募者数は減って2,421名でした。

県立の中高一貫校の第一号、並木中等は、昨年は男子の応募者が減り、女子は少し増えていましたが、今年は男子がやや減、女子は減りました。男子の難度はあまり変わっていないようですが、女子はやや入り易くなったかもしれません。2020年度開校の竜ヶ崎第一高附属は、一昨年、昨年と少しずつ減っていた男子の応募者が増加、女子は昨年に続いて今年も応募者が減りました。スーパー・サイエンス・ハイスクールに指定されていることもあって人気が高いのですが、女子は少し敬遠しているのかもしれません。ただ、少定員ですから応募者が減った女子も実質倍率3倍を超えていますので、あまり入り易くなった印象はありません。男子はやや難化したようです。

一昨年開校の土浦第一高附属は公立トップ校の併設校です。昨年は男子の応募者数が増加していましたが、地域に難度が定着したようで今年は減りました。女子

は昨年並みの応募者数です。男子は応募者が減っても入り易くはなっていないようですし、女子も昨年並みの難度でしょう。

県西部の古河中等は、県内の他の公立一貫校とは通学圏があまり重なりません。昨年は男女とも一昨年並みの応募者数でしたが、今年は男子の応募者がやや増加、女子は減っています。男子の難度はあまり変わっていないようですが、女子は実質倍率が2倍をきっていて、少し入り易くなったようです。2019年度開校の下館第一高附属は、昨年は男女とも応募者が少し減っていましたが、今年は逆に男女とも少し増えています。少定員で、女子の応募者が男子よりも多いため、実質倍率の上昇も大きく、少し難化したようです。男子もやや難化したかもしれません。

関東鉄道常総線の北の終点が下館です。下館第一高附属に続いて下妻第一高附属と水海道第一高附属が昨年開校して常総線沿線に中学受験が広がりました。開校2年目の今年は、下妻第一高附属は男子が昨年と同じ応募者数、女子は減りました。女子は応募者が減っても「絞られただけ」でしょう。男女とも難度は昨年並みだったようです。水海道第一高附属は、男子は応募者数が増加、女子は昨年並みでした。下館第一高附属や下妻第一高附属の男子の状況を見ると、水海道第一高附属に受検生が流れたわけではなく、水海道地域で男子の中学受験が拡大したと考えられます。少定員ですから少し難化したようです。女子も昨年並みの難度だったと思われる。

水戸周辺から県北部にかけては、土浦第一高附属と並んで県内トップ校の水戸第一高附属が3年目の入学選抜でした。昨年は女子の応募者数が増加、男子も少し増えていましたが、今年は男女とも減りました。地域に難度が定着したのでしょう。受検生が絞られたからです、難度は男女とも変わっていないよう

です。同じく3年目の勝田中等は、一昨年は水戸第一高附属の注目度の方が高く、予想外に低い倍率でしたが、昨年は認知度が上がって男女とも応募者が増えました。今年は男女とも減って、隔年的な変化になってきました。難度面は少し入り易くなったかもしれません。

日立第一高附属は、一昨年は水戸第一高附属の影響で男女とも応募者が減りましたが、昨年は女子が一昨年並み、男子が増加、今年は男女とも増えて人気が戻ってきました。男女ともやや難化したようです。2019年開校の太田第一高附属は、開校時は定員割れ、一昨年は男女とも応募者が増えましたが、昨年は少しずつ減り、今年は女子が少し増えたものの、男子はやや減っています。男女とも合格者は少なく、難度はあまり高くなかったようです。

東部の鹿島高附属と鉾田第一高附属は両校とも2019年開校です。鉾田第一高附属は、昨年は男女とも一昨年とあまり変わらない応募者数でしたが、今年は男女とも減っています。少し入り易くなったようです。鹿島高附属は、昨年は男女とも応募者が減っていて、特に男子の減少が目立ちましたが、今年は男子が増加、女子は少し減っています。男子はやや難化、女子は少し入り易くなったようです。

◆ 寮制校の東京入試

公立中高一貫校でも寮制入試を行う学校があります。鹿児島県立楠隼(なんしゅん)中学校で、全寮制公立中高一貫男子校です。東京会場だけの応募者数は未公表ですが、県外各会場合計の応募者数は減っていて、県内も少し減っています。少し入り易くなったかもしれません。

☆ 都立白鷗高附属の特別枠の内訳

分野	募集定員	応募者数		受検者数		合格者数	
		男	女	男	女	男	女
囲碁・将棋	6名程度	4	0	4	0	2	0
邦楽		0	1	0	1	0	1
邦舞・演劇		0	1	0	1	0	1